

OEDにおけるマロリーの引用例

～唯一例をめぐる～

玉 木 雄 三

1. はじめに
 2. 唯一例から見えるもの
 - (1) Roundsepike
 - (2) Because
 - (3) Quest
 - (4) Race
 - (5) Priory
 - (6) At arms!
 - (7) Treatise
 - (8) Mare's son
 - (9) I will well.
 3. おわりに
- 【付録】唯一例の全用例

1. はじめに

歴史的原理に基づいた*The Oxford English Dictionary*(OED)は、44年の歳月を経て1928年完成した。1933年にはSupplement全1巻が、さらに72年から86年にはNew Supplement全4巻が刊行された。そしてこれらすべてを統合し、5000余りの新語を追加し、発音表記を改め、例文の修正等を行って、89年OED第2版(全20巻)が出版された。古英語から1980年代前半までの文献資料から採録された50万を超える単語の意味と用法、240万にも及ぶ膨大な引用例が、年代順に掲載されている。当然のことながら、その中には15世紀後半の散文作品であるSir Thomas Maloryの*Morte Darthur*(『アーサーの死』)からの引用例も約1650例含まれている¹⁾。

マロリーから引用された例文には、ごく一部を除いて「1470-85 MALORY *Arthur*」と表示されている。また、最終巻の文献リストには、採録にあたってどのようなテキストが使用されたかが記されている。マロリーの項目には、初版・第2版とも「Sommer 1889; also Copland 1557;1634; Southey 1817」と記載されている。「Sommer 1889」が最初に挙げられているのは、マロリーの用例が主にソマー版(William Caxton: *Le Morte Darthur*(1485)の翻刻版)から引用されていることを示している。次に「Copland 1557」と記載されているが、コップランド版からの用例は「1557 *K. Arthur*(Copland)」という表示のもとに採録されており、「マロリーの英語」とは一応別の枠組みで取り扱われている。したがって、この項目に他のテキストと併記するのは、例文標識との関連において整合性を欠いているように思われる。さらに「1634」というのはスタンスビー(Stansby)が校訂した*Morte Darthur*のことであり、「Stansby 1634」と表記すべきであろう。このように記載されている事項だけでも、矛盾や不備が認められる。

また実際に、マロリーの例文採録の状況を調査した結果、次に示すようにさまざまなテキストが使用されていることがわかった。OED初版本体では、Wynkyn de Worde 1529, Stansby 1634, Chalmers 1816, Southey 1817, Strachey 1868, Sommer 1889の各版本が用いられている。ただし、例文に「1634」と表示されていても、直接スタンスビー版(1634)から引用されたのではなく、スタンスビー版に基づいて

出版されたチャーマーズ版(1816)に拠った可能性がきわめて高い²⁾。また*New Supplement*(4 vols., 1972-86)では、ウィンチェスター写本(Winchester MS)に基づいて校訂されたヴィナーヴァ(Vinaver)版(1947;1967)も利用されている。このように典拠テキストの中には1800年代に校訂あるいは刊行された版本も多数含まれている。そのため、それらから採録された用例が、中英語から近代英語へと移行する時代に書かれたマロリーの英語を精確に映し出しているのかどうか、はなはだ疑わしいのである³⁾。

*OED*第2版に採録されたマロリーの用例のほとんどは、さまざまな文献から引用された数多くの例と併記されているが、ごく稀にマロリーの例しか挙げられていない場合がある。単語の形態や語義、イディオムやコロケーション、あるいは統語論上の記述等に関してマロリーの例しか示されていない、つまり唯一例がいくつかの単語に関して見られる。このような事例は54単語(例文数は61例)について確認できる。また、それらは4例を除いて原本であるキャクストン版マロリー(1485)から引用されたものである。

本小論では、これらの唯一例を資料として、*OED*における採録上の問題点を指摘するとともに、マロリーの英語の特徴も探ってみたい。その方法として、原本であるキャクストン版(1485)とほぼ同時代、1470-80年に書かれたとされるウィンチェスター写本(正式にはBritish Library MS Additional 59678と呼ばれる写本)⁴⁾、および*Middle English Dictionary*(*MED*)を援用する。*MED*は元来、*OED*編纂のために収集された中英語の文例を基本としている。しかし、マロリーからの引用に際しては、*OED*とは異なりウィンチェスター写本の校訂本が主に使用されている。

本論におけるキャクストン版マロリー(1485)からの引用は、Sommerの復刻版*Le Morte Darthur*(1889-91)に拠る。また、ウィンチェスター写本に関しては、ファクシミリ版*The Winchester Malory*とその校訂本であるVinaver ed. *The Works of Sir Thomas Malory*(3rd Edition)を使用する。

2. 唯一例から見えるもの

*OED*に採録された用例が、すべて適切にかつ正しく用いられたものであるとは限らない。原著者自身による書き間違い、写字生による転写ミス、校訂や印刷の際のミス等が、全くなかったとは言い切れない。そして、それらが単なるミスではなく、いずれかの段階で意図的に改変されたものであったかも知れない。まして、写本と刊本が混在した初期印刷本の時代となれば、なおさら不確定な要素が入り込むのではないだろうか。したがって、そのような時代に書かれたマロリー『アーサーの死』からの引用に際しても、*Pretend*(v.16.)のように、他の版本と校合してその疑義をたどそうとした例も見られる。

1470-85 MALORY Arthur i. xviii. 64 They furnysshed hem...of good men of armes and vytaille and of alle maner of abylement that *pretendith* to the werre [ed.1529 ordynauce that *belongeth* to warre].

ウィンキン・ドゥ・ウォードが校訂した1529年版*Morte Darthur*のテキストと比較照合することによって、ここに用いられている*pretendith*は‘belong’を意味する*pertain*の誤りであろう(perhaps an error)と推断している。

*OED*に採録されたマロリーの用例に関して、上記の*Pretend*以外にも、このような誤りの可能性はないのか、また例文として適切であるのか、まず検証してみたい。

(1) Roundsepike, n. A leafless branch. Of obscure origin. cf. *rampike* and *rampick*.

1470-85 MALORY Arthur vi. xvi. 209 Ouer his hede he sawe a *rownsepyk*, a bygge bough leueles. *Ibid.* Syr Launcelot putte awaye the stroke with the *rounsepyk*.

ウィンチェスター写本では、上記の2例はOver hym above his hede he sawe a *rough spyke*, a

bygge bowghe leveles.(283/29)、Sir Launcelot put away the stroke with the *rough spyke*.(283/35)となっている。両者におけるこのような異同は、次のような可能性を示唆している。一つは、チャクストンが印刷の際に用いた原稿にすでに*rownsepyk*という語が用いられていた可能性、もう一つは、チャクストンが原稿の文字を見誤った可能性である。仮に後者の立場を取れば、*rough*は‘having thorns, sharp twigs’(MED)、*spike*は‘a pointed limb of a tree’(MED)となり、*rough spyke*は特異な単語ではなく、‘A pointed limb of a tree having thorns’という一般的な意味を表す語となる。

(2) Because, adv. 2.c. For the sake of not; for fear of.

1470-85 MALORY *Arthur*(1817) II.452 *By cause* of brekyng of myn avowe, I pray yow all lede me thyder.

この用例はチャクストン版マロリー(1485)からではなく、サウジー版(1817)から採録されたものである。サウジー版は原本をほぼ忠実に再現した版本であるが、下に示した原本と比べると、綴り字に関して若干の相違が認められる。

By cause of brekyng of myn auowe I praye you al lede me thyder.(858/31-32)

重傷を負ったランスロットが、かつての誓いを守るために「喜びの砦」(Joyous Gard)に埋葬してくれるよう懇願している場面である。OEDは、この*by cause*(=because)に‘not’の意味を読み込もうとしている。現代英語訳を試みたLumianskyは、“Because of not breaking my vow, I pray you all to take me thither.”(p.748)という訳をつけている。確かにnotを補って解釈の方が論理性に富み、文意は明快になるであろう。しかしながら、文全体の意味を明瞭にすることとその単語がもつ意味を規定することとは別の問題ではないだろうか。

ウィンチェスター写本においても、次のように否定辞は入っていない。

And bycause of brekyng of myn avowe, I praye you al, lede me thyder.(1257/31)

また、1529年に刊行されたチャクストン版の改訂本であるウィンキン・ドゥ・ウォード(Wynkyn de Worde)の版においても、この箇所には否定辞は挿入されていない⁵⁾。このことから考えれば、この副詞節は論理性や明快さに欠けるかも知れないが、‘because it would break my vow’と読めば、それほどねじれた文意にはならないと考えるのである。

(3) Quest, n. The knights engaged in such an enterprise.

1470-85 MALORY *Arthur* xvi. xii. They supposed he was one of the *quest* of the Sancgreal.

この用例は標記の語義を示す独立した項目ではなく、Questの一般的な意味の中で扱われている。

In mediæval romance: An expedition or adventure undertaken by a knight to procure some thing or achieve some exploit; the knights engaged in such an enterprise.(Quest, 5.)

このような意味をもつ*quest*の用例が、チャウサー(Chaucer)を初出(c1384)として1876年まで挙げられている(チャウサーの場合、写本によっては*lestes*(=*lust*)あるいは*bestes*という読みもある)。しかしながら、採録されている例は、マロリーを除いてすべて「騎士」ではなく「行為」を表している。マロリーが用いた*quest*には、本当に人間を表す特異な意味があったのであろうか。

ウィンチェスター写本では、次のように書かれている。

And anone they supposed that he was one of the knyghtes of the Rounde Table that was in the queste of the Sankgreall.(966/18-20)

この文とOEDに採録された例文を見比べてみると、OEDには、写本にある*knyghtes of the*

*Rounde Table that was in the*というフレーズが欠けている。ヴィナーヴァが本文の脚注で指摘するように、この箇所が *homoeoteleuton*(同一語句結尾)のために、転写あるいは印刷の際に抜け落ちたとすれば、マロリーの *quest* は「騎士」ではなく「探求・探索」を意味することになり、‘the knights engaged in such an enterprise’ という定義は当てはまらなくなる。

(4) Race, v. Of boars: ?To slash with the tusks.

1470-85 MALORY *Arthur* vii. xvii. They yede to bataille ageyne tracyng *racynge* foynyng as two bores.

*OED*の定義も疑問符付きである。ウィンチェスター写本では、次のようになっている。They yode to batayle agayne, trasyng, traversynge, foynynge, and rasyng as two borys.(323/12-13)

該当する箇所は *racynge*(=racing)ではなく、*rasyng*(=rasing)となっている。*OED*はRaceをRase(Raze)のvariantであるという認識を示しているので、あえて‘of boars’と文脈を限定して定義することが妥当なのか、疑問が残る。単に、Rase, v.1 l.b. To slash; to make way or penerate.の意味範疇に入れればよいのではないだろうか。このRaseの語義の初出例として、マロリーからの例が挙げられている。

1470-85 MALORY *Arthur* vii.iv. They rasshed to gyders lyke borys tracyng *rasyng* and foynynge.

一方MEDの解釈はこれとは異なり、Rasen, v.(2)の項に入れ、‘to rage’の意味に取っている。

(5) Priory. A monastery or nunnery governed by a prior or prioress.

1470-85 MALORY *Arthur* xiv. i. 642. I wel ought to knowe you..., al though I be in a *pryory* place.

文中の *pryory*(=priory)が示す意味が特異というのではなく、限定的(attributive)な用法でこの名詞が使われている点で、極めてまれな用例である。Prioryに建物や場所の意味が含まれている以上、コロンケーションとして適切であるとは言えないように思える。

ウィンチェスター写本では、*priory place*は*poor place*という表現になっている。

I well oughte to know you..., allthoughe I be in a poor place.(906/26-27)

これに続く文章の中にある *riches*, *poverty* という言葉からも、‘poor place’と解釈するのがよいのではないだろうか。

For som men called me somtyme the Quene of the Wast Landis, and I was called the quene of moste *rychesse* in the worlde. And hit pleased me never so much my *rychesse* as doth my *poverté*.(906/27-30)

(6) At arms! Take to your arms, be ready for fight!

1470-85 MALORY *Arthur* i. xi.(1634) 22 ‘Lords, *at arms!* for here be your enemies at your hand.’

この意味では *To arms!* が一般的ではあるが、古くはOld Frenchの影響で *As arms!* や *At arms!* が使われていたことが、定義の前に述べられている。例文には1634年、つまりスタンズビー版から採録したという表示がなされているが、綴り字から見て1816年に刊行されたチャーマーズ版から引用されたものであろうと考えられる。原本では次のようになっているが、単語そのものは同一である。

Lordes *att armes* for here be your enemyes at your hand.(53/5-6)

しかし、ウィンチェスター写本では全く違うフレーズが用いられている。

'Lordis, *to harneys!* for here be oure enemyes at youre honde!(27/4)

写本には*at arms!*というイディオムは見られない。また、*to harneys*も会話文では見られず、He made a grete cry and noyse, and cryed *unto harneyse* all that myght bere armys.(677/18)のような地の文に見られるに過ぎない。しかしOEDのHarnessには、2.b.Phrase, *to harness*: cf. *to arms*.とあり、ほぼ同時代の1475年と1548年の例が挙げられている。したがって、*at arms!*という表現がマロリー自身のものであったかどうかは確定しがたい。

(7) Treatise, n. ?An entreaty.

1470-85 MALORY Arthur iv. xxv. 153 Sir launcelot leue that swerd behynde the, or thou wil dye for it. I leue it not sayd syr launcelot for no *treatys*.

ウィンチェスター写本では、この箇所は次のような記述になっている。

'Sir Launcelot, leue that swerde behynde the, other thou wolt dye for hit.' 'I leue hit not,' seyde sir Launcelot, 'for no *thretyng*.'(280/35-37)

ここでは*thretyng*(=threating, threat)という語が用いられている。ランスロットに対峙する騎士たちが、*grymly voyces*(=grim voices)で語った言葉である。したがって、「懇願」というより「脅し」と解釈する方が妥当であり、*treatys*という単語をここで用いるのは文脈上適切とは言えないように思われる。

次に挙げる唯一例は、マロリーの文体の特徴が看取できるのではないだろうか。

(8) Mare's son. A horse.

1470-85 MALORY Arthur ix. iii. 342 I calle my self neuer the wers knyght whan a *marys sone* fayleth me.

Ibid. xx. xxii. 837 Yf thys *marys sone* hath faylled me, wyt thou wel a kynges sone and a quenens sone shal not faylle the.

MEDにも、マロリーから類似した例が採録されている。

Thoughe a *marys sonne* hath fayled me now, yette a quenys sonne shall nat fayle the!(429/15-16)

OEDには単に*a horse*という語義が示されているに過ぎないが、上の文例から分かるように、*mare's son*という表現は騎士同士の戦いの場面で、しかも「雌馬が私を裏切っても」という定型化された構文で用いられている。つまり、自分の雌馬が相手に倒されても、自らは果敢に戦うという強い意志が吐露されている。文中の*king's son*, *queen's son*は自分自身のことを指し示し、負傷した雌馬と自分を対比するための表現手段としてこの語句を用いている。したがって、この語句の使い方は単なる*a horse*, *a steed*を意味するだけでなく、マロリーの文体的な工夫、つまり一種の言葉遊びが仕込まれているように思えるのである。

(9) I will well. I assent, 'I should think so indeed'.

1470-85 MALORY Arthur i. xvi. 59 I truste in god myn eure is not suche but some of them may sore repente thys, *I wol wel* said Arthur, for I see your dedes ful actual.

Ibid. iv. xxi. 146 Yonder is a knyght.., lete vs put it bothe vpon hym, and as he demeth so shall it be. I wylle wel said the knyght.

*OED*では、Willがもつ意味との関連を指摘しながらも、Will, v.17.d.の項目にPhraseとして独立した形で扱われ、マロリーの例だけが引用されている。一方*MED*では、Willen, v.(1) 2.(a) To be willing; accede to an action, consent; agree to or with a proposal or an idea.という意味範疇の中に、別の箇所から採ったマロリーのこのフレーズが収録されている。‘Hit shall be sone revenged,’ seyde kyng Ban...‘*I woll welle,*’ seyde kyng Arthure.(34/16)

独立した項目で扱うことによって、*I will well.*という定型文句が、マロリーの特徴ではないかという可能性を示唆してくれる。

3. おわりに

*OED*におけるマロリーの引用例を調査するなかで、単語の形態や語義に関してマロリーの用例しか挙げられていない事例が、51単語(61例)について発見された。今回は、そのなかで辞書の例文として妥当性が疑問視されるもの、またマロリーの独自性が感じられるものをまとめてみた。

現在、*OED*第3版の発刊に向けて改訂作業が進められ、その一端が*Additions Series*として逐次刊行されている。そこには、1989年刊行の第2版で漏れた単語や新たな語義が収録されている。改訂版でこれらは追加されるであろうが、例文採録の際に使用されたテキストの洗い直しも忘れてはならない。

*OED*は、あくまで歴史的原理に貫かれた辞書である。それぞれの単語に年代ごとの例文が提示され、語義と語形の変遷が記されている。したがって、そこに引用される用例は、その当時の英語を反映するものでなければならない。しかしながら、筆者のこれまでの調査で、トマス・マロリーからの引用が必ずしも「原本」と一致していないことが判明している。マロリーの自筆写本が現存しない以上、可能な限り原典に近いテキストから引用されなければならない。しかし、現実には数百年後に校訂された版本からも採録されている。

典拠テキストおよび用例の検証過程において、独創性と誤りの可能性を同時に含んでいる唯一例の調査も、その一つの手段となるのではないだろうか。

注

- 1) CD-ROMを使って「1470-85 Malory Arthur」の引用例を検索すると、「1653」という例文数が表示される。しかし、2つの見出し語が一つの例文中に含まれる場合には、辞書では片方において「Malory Arthur」という表示は省略される。例えば、Therefore starte vpon thy hors.という用例はStartとUponの2つの項で使われ、前者では「1470-85 Malory Arthur」と書かれているが、後者では1470-85[see START v.1]という書き方になっている。したがって、CD-ROMの著者別の検索データには現れてこない。他にもこのような処理方法が取られている可能性があるため、ここでは「約1650例」という概数を用いた。
- 2) スタンズビー版とチャーマーズ版との本文比較に関して、鳴門教育大学教授向井毅氏の協力を得ました。改めて、深く感謝申し上げます。
- 3) 拙論「*OED*におけるマロリーの引用例について～改訂版への提言～」において、採録例文と原本キャクストン版マロリーとの異同を論じている。
- 4) Cooper, “M for Merlin: The Case of the Winchester Manuscript”, p.93.
- 5) Sommerの復刻版およびSpisak & Matthews, *Caxton’s Malory: Le Morte Darthur*に収められたde Worde版との異同リストにこの箇所は挙げられていない。

参考文献

- The Oxford English Dictionary Second Edition on Compact Disc*. Oxford: Oxford University Press, 1994.
- Gaines, Barry. *Sir Thomas Malory: An Anecdotal Bibliography of Editions 1485-1985*. New York: AMS Press, 1990.
- Le Morte d'Arthur: A Facsimile of Caxton's Edition(1485)*. London: The Scholar Press, 1976.
- Lumiansky, R.M. ed. *Le Morte Darthur*. New York: Charles Scribner's, 1982.
- Mukai, Tsuyoshi. "Stansby's 1634 Edition of Malory's *Morte*: Preface, Text, and Reception", *POETICA*, No.36(1992), Tokyo: Shubun International.
- Sommer, H. Oskar. *Le Morte Darthur by Syr Thomas Malory*. Reprinted from the edition of 1889-1891, London(AMS Edition, 1973).
- Spisak, James W. & W. Matthews eds. *Caxton's Malory: Le Morte Darthur*. California: Univ. of California Press, 1983.
- 玉木雄三「OEDとMaloryの英語－語彙とその意味をめぐって－」『英語・英米文学の心』 大阪：大阪教育図書、1999.
- 「OEDにおけるマロリーの引用例について～改訂版への提言～」 *Neo-ANGLICA* 創刊号（2000）、関西大学英語学研究会.
- 「OEDと「マロリーの英語」」『英語青年』第145巻第12号(2000年3月)、東京：研究社.
- 「OEDとマロリーの英語－ドゥ・ウォード、コップランド、スタンスビーの諸版をめぐって－」『千里山文学論集』第64号(2000年9月)、関西大学大学院文学研究科.
- 寺澤芳雄「OED 2（改訂・統合第2版）管見」『英語青年』第135巻第2号(1989年5月)、東京：研究社.
- 「英語の世紀」『英語青年』第144巻第13号(1998年8月)、東京：研究社.
- Vinaver, Eugène ed. F.J.C. Field rev. *The Works of Sir Thomas Malory*. 3 vols. 3rd Edition, Oxford: The Clarendon Press, 1990.
- 渡辺秀樹「OED 3に収録される新語・新語義－OED Additions Series 1, 2, 3を読む－」『言語文化研究』第24号（1998）、大阪大学言語文化学部大学院言語文化研究科.

【付録】唯一例の全用例

以下に挙げる唯一例の用例のうち、4例が「原本」であるキャクストン版マロリーの本文と異なる。それらについては、それぞれの項目にその本文を示す。

1. 形態にかかわる唯一例

(1) 単語自体的場合

- ① Chaflet, n. [OF. chafault] A scaffold, platform, elevated stage.

Kynge Arthur dremed a wonderful dreme, & that was this, that hym semed he satte vpon a *chaflet* in a chayer, and the chayer was fast to a whele.

- ② Intronization, n. Variant of Enthronization.

Thenne the senatours maade redy for his *Intronysacyon*.

- ③ Male fortune, n. Misfortune.

Somtyme he was putte to the werse by *male fortune*.

Syr launcelot by *male fortune* stroke sir Tristram on the syde.

- ④ Roundsepike, n. A leafless branch.
 Ouer his hede he sawe a *rownsepyk*, a bygge bough leueles.
 Syr Launcelot putte aweye the stroke with the *rounsepyk*.
- ⑤ Selar, n. Variant of Celure. Canopy.
 The selar of the bedde.
- ⑥ Therebeside, adv. therebesides.
There besydes were viij knyghtes that aspyed them.

(2) 接辞の場合

A. 接頭辞

- ① Beskyfte, v. [be-+ME.*skyfte*] *trans.* To thrust off.
 She coude not *beskyfte* hym by no meane.
- ② Ynombred, pa.pple. of Number v.
 His armye...with the garneson of godard and sarasyns of Southland *ynombred* lx M of good men of armes.

B. 接尾辞

<名詞語尾>

- ① Landage, n. Landing, coming ashore.
 There was syr Mordred redy awaytynge vpon his *londage* to lette his owne fader to lande vp the lande that he was kyng ouer.
- ② Orgulity, n. Pride, haughtiness.
 Thurgh our *orgulyte* we demaunded bataille of you.
 For pryde and *orgulyte* he wold not smyte sire Palomydes.

<形容詞語尾>

- ① Lotless, a. Without harm or injury.
 I am sure and I doo bataille with you I shalle not escape with oute grete hurtes and as I suppose ye shalle not escape alle *lotles*.
- ② Mighted, a. Having might.
 He was the clenest *myzted* man and the best wynded of his age, that was on lyue.
- ③ Profitly, a. Profitable.
 I calle hym now one of the beste knyghtes...and the most *profytelyst* man.
- ④ Roted, a. Skilled, practised, experienced.
 This malgryne was an olde *roted* knyghte, and he was called one of the daungerous knyghtes of the world to doo bataille on foot.

<副詞語尾>

- ① Mishaply, adv. By mischance.
 By myshap thou camyst behynde hym and *myshappely* thou slewe hym.

2. 語義にかかわる唯一例

- ① Abait, v. [On+Bait] To set on (a dog), to hound on, bait.

- This lady the huntresse had *abated* her dogge for the bowe at a barayne hynde.
- ② Umbecast, v. *intr.* Of a hunting dog: =Cast, cast about.
Whan the hynde came to the welle...the dogges came after and *umbecaste* aboute, for she had lost the veray parfyte feaute of the hynde.
- ③ Actual, a. Abounding in action, active, energetic.
'I wol wel,' said Arthur, 'for I see your dedes full *actual*.'
- ④ Actually, adv. Actively, energetically.
Then on foot they drew their swords, and did full *actually*.
Caxton: Thenne on foote they drewe their swerdes and dyd ful actually.(146/31-32)
- ⑤ Assign, v. To make an assignation or appointment with (a person) *to do* a thing.
I *assigne* you to mete me in the medowe.
And there this night I had *assigned* my love and lady to have slept with me.
Caxton: And there thys nyght I had assygned my lady to haue slept with me.(189/9-10)
- ⑥ Because, adv. For the sake *of* not.
By cause of brekyng of myn avowe, I pray yow all lede me thyder.
Caxton: By cause of brekyng of myn auowe I praye you al lede me thyder.(858/31-32)
- ⑦ Departition, n. Departure.
Ye putte vpon me that I shold ben cause of his *departycyon*.
- ⑧ Hostage, n. A treaty to which parties are pledged.
And there with alle was made *hostage* on bothe partyes, and made hit as sure as hit myghte be.
- ⑨ Mischievously, adv. Wickedly.
His squyers they said hit was foul done, and *meschyeuously*.
- ⑩ Over-govern, v. *trans.* To rule over.
It was grete shame vnto them all...to be *ouer gouernyd* with a boye of no hyghe blood borne.
- ⑪ Part, n. A part, on part, early analytical ways of writing Apart.
We wille go on *parte*.
- ⑫ Pretend, v. [Not naturalized in quotation.] *Pertain*(per. an error)
They furnysshed hem...of good men of armes and vytaille and of alle maner of abyement that *pretendith* to the werre.
- ⑬ Quest, n. The knights engaged in such an enterprise.
They supposed he was one of the *quest* of the Sancgreal
- ⑭ Race, v. Of boars: ?To slash with the tusks.
They yede to bataille ageyne tracyng *racynge* foynyng as two bores.
- ⑮ Remembrance, n. An article serving to remind one person of another; A heraldic device.
Tristram...commaunded...his seruaunt to ordeyne hym a blak sheld with none other *remembraunce* therin.
- ⑯ Request, n. A knightly quest.
Thenne were they called al thre..., and eueryche of hem...armed them surely. But sir gauayne had the fyrst *request*, and therefore we wille begynne at hym.
- ⑰ Rush, v. To smash, shatter.
He smote thurgh shelde...and al to *russhed* and brake the precious stones.

⑱ Sangrail, n. The book of the Grail.

As it telleth after in the *sangraylle*.

⑲ Spirituality, n. pl. Ecclesiastical ground or precincts.

Bors lete bery hym by his syster and by Galahad in the *spyrytueltees*.

⑳ Tell, v. To direct (a person) to a place. cf. Teach

Canst thow *telle* me vnto somme chappel where that I may burye this body?

㉑ Treatise, n. ?An entreaty.

They asked herborow, but the man of the courtelage wold not lodge them for no *treatyce* that they coude treate.

Sir launcelot leue that swerd behynde the, or thou wil dye for it. I leue it notsayd syr launcelot for no *treatys*.

㉒ Ventail, n. One of the vents or air-holes of this.

The blood brast oute at the *ventayles* of his helme.

㉓ Void, v. To dismount from (a horse).

Thenne the kyng of the C knyghtes *voyded* the hors lyghtly.

㉔ Will, v. I will well.: I assent, 'I should think so indeed'.

I truste in god myn eure is not suche but some of them may sore repente thys, *I wol wel* said Arthur, for I see your dedes ful actual.

Yonder is a knyght..., lete vs put it bothe vpon hym, and as he demeth so shall it be. *I wylle wel* said the knyght.

3. 統語論にかかわる唯一例

① Compare, v. *refl.* To be compared.

Whanne the kyng sawe hym al redy armed...the kyng said nay Tramtryst hit wille not auaile to *compare* the ageynst me.

② Enfellowship, v. *intr.* To enter into fellowship.

And they *enfelaushypped* to gyder.

③ Marvel, n. mervel me thinks.

Merueylle me thynketh said the grene knyght to the damoyse why ye rebuke this noble knyghte as ye doo.**

④ Of, prep. In the construction of adjs. whole of a wound

Sir Tristram was...hole *of* his woundes.

⑤ Ought, v. Pa.t. of Owe v. To have or possess. With inversion of sense: Belonged.

There came the knyghte to whome the paelione *ought*.

⑥ Over-long, prep. [Over prep. + Long, aphetic form Along prep.] Along, over the length of.

Sir Tristram behelde the maronnens how they sayled *ouer longe* humber.

⑦ Priory, n. A monastery or nunnery governed by a prior or prioress.

I wel ought to knowe you..., al though I be in a *pryory* place.

4. イディオムとコロケーションの例

- ① At arms! Take to your arms, be ready for fight!

‘Lords, *at arms!* for here be your enemies at your hand.’

Caxton: Lordes att armes for here be your enemyes at your hand.(53/5-6)

- ② Four, a. on all four feet. On all-fours.

Thenne balan yede on al *four* feet and handes and put of the helme of his broder.

- ③ Ladle, n. ladle-washer

What arte thou but a luske and a torner of broches and a *ladyle* wessher.

- ④ Mare, n. mare’s son. A horse.

I calle my self neuer the wers knyght whan a *marys sone* fayleth me.

Yf thys *marys sone* hath faylled me, wyt thou wel a kynges sone and a quenes sone shal not faylle the.

- ⑤ Nourished, ppl. a. nourished brother. Foster-brother.

Syre Ector...rode vnto the lustes, & with hym rode syr kaynus his sone & yong Arthur that was hys *nourisshed* broder.

- ⑥ Service, n. give (one) service; to have the service of the church performed over a dead man.

And on the morne he gaf hym seruyse and putte hym in the erthe afore the hyghe Aulter.

- ⑦ Strongly, adv. eat strongly: to eat heartily.

Soo whan sir kay was vnarmed he asked after mete; soo there was mete sette hym, and he ete *strongly*.

- ⑧ Way, n. way-lead, v. *trans.* to guide, conduct.

Whether ward ar ye *way ledyng* this knyghte.

* Lumianskyは、このactualを‘well’と解釈し、‘I saw your deeds full well.’(p.24)と訳している。

** この用例は、Impersonal Constructionの中で唯一挙げられている例である。

(付記) 上記のリストには、本論で言及したようなウィンチェスター写本と異なっているものが数例ある。以下、左がOEDの用例、右がウィンチェスター写本に用いられた語形である。

ynombred : numbirde(233/6)、londage : landyng(1229/27)、orgulyte : orgule(718/15)

mysshappely : by myssefortune(302/18)、telle : shew(963/10)、enfelaushypped : felyshyppyd(497/13)などである。これらを見る限り、ウィンチェスター写本の方が概して伝統的な使い方をしているように思える。